

教育課程における〈ゼミナール〉〈卒業論文〉の位置と実際の指導 —書くことと生きることの区別と連関—

加藤 聡一 KATO H Souichi

2016年度、私のゼミナール（「子どもの生活と教育」領域・加藤聡一ゼミ）では12名が卒業論文を書き上げ、2017年1月27日に公開の卒業論文発表会をおこなった（「プログラム・題目一覧」参照）。本論文では、実際の指導の概要をまとめながら、どのような考えで指導したのか、ゼミ論・卒論として整理する。その際、大学4年間のカリキュラムの集大成としての卒論、書くことの16年間の集大成としての卒論、というように、生きること（発達・成長）の連続性の中で位置づけを考えてみる。

§ 1 専門ゼミナールと卒論指導までの概要（1～2年次）

このたび卒業論文をまとめた学生たちは、私が4年前、名古屋芸術大学人間発達学部に赴任した時入学してきた⁽¹⁾。私の担当する講義を基本的にすべてとってからゼミに分属して卒業するはじめての学年になる。私の担当した講義は、1年生前期の「子ども学総論」（卒業必修）、2年後期の「教育課程論」（幼小免必修、BCクラスのみ）、3年後期「教育方法論」（幼小免必修）である。

当初より、「本当に自分のやりたいことをじっくりと見つけてほしい」という思いがあり、1～2年生は、これまで教育や生活で受けてきたダメージを回復しつつ、新しく今までやったことのないことにも取り組みながら、しっかり進路を迷い、自分と向き合う準備をする「ウダウダと過ごすことも大切な時期」だと伝え、また「卒論とゼミは、最強の就活になる」と予告しておいた⁽²⁾。1年生前期の「子ども学総論」は、学生の様子がつかめないため試行錯誤であったが、かなり騒がしく、また私も意図的に注意せず、自覚を待ったのだが、卒論の〈たね〉をさがす意識はなかなか持ってもらえなかった。

並行して、「ゼミナールⅠ」を担当した。2年生になると「ゼミナールⅡ」も担当したが、ともに専門テーマは意識しないで、全員に共通のボランティアのやり方、基本的レポートの書き方、企画の組み方などをおこなった。現在は1年生のゼミはクラス替えせずに同じメンバーでの持ち上がりだが、この時は2年生で組み替えたので、新しいメンバーを把握するのに時間がかかったことと、2年生になるといっしょに行動するグループや進路なども分かれてくるので、なかなか全員同じ企画をするのが難しかった。ただ友だちづくりにはよい場にもなったようで、この学年はそういうつながりを感じた（同じクラスつながりの友だちもあった）。

私のゼミ論・卒論のベースは、京都大学教育学研究科後期博士課程にいた時およびそのあと助手をした時の経験による。学部との関係でいうと教育方法学講座（Bコース）で、

担当教員は、稲葉宏雄教授、田中昌人教授、天野正輝教授であった⁽³⁾。この経験を元に、理論的には、デューイを参考に、ゼミをオキュペーションの一形態の〈生活＝研究共同体〉とし、それ以前の学校階梯とは、クラスや総合学習の集団、卒業後は、〈ラージソサエティ〉になるというように連続性で考えた(加藤、2010年)⁽⁴⁾。その後、東京理科大学、武蔵大学に勤務したが、ともに教職課程の所属で、卒論指導を伴うゼミを持つことはできなかった。これは我が国の教職課程のあり方として大問題である。卒論指導あつての〈大学教員〉と思っていたので、人間発達学部に来て、専門のゼミを持って卒論指導できることが楽しみであった。

§ 2 専門ゼミナールと卒論指導の概要(4年次8月まで)

3年次に学生は8つの領域のゼミ(「ゼミナールⅢ」;新カリキュラムでは「専門演習」)に所属し、そのまま4年次に持ち上がる(「ゼミナールⅣ」;新カリキュラムでは「卒業論文・卒業制作」)。領域は2014年度より全教員が担当することになった。領域を複数教員が担当する場合は、領域ごとに進め方がちがうが、遅くとも4年次には卒論指導担当教員が確定し、ゼミは分化する。「子どもの生活と教育」領域は、赴任したばかりの鎌倉博先生と合同で26名が所属した⁽⁵⁾。3年次には、地域の視点をもつということで、北名古屋市とかかわった。児童課を本学部ゼミとしてはじめて訪問し(2015年6月4日)、師勝北小学校(坪内英樹校長)に授業見学に行った(6月25日)ほか、市民活動推進課の樋口由訓氏(6月18日)、北名古屋市商工会青年部沖野剛氏・高橋雅俊氏(7月9日)に来校いただき交流できた。「北名古屋市の子ども・青年は北名古屋市全体で育てる(ともに育つ)」ことを考えて、学生が位置づくようにしてきた。

残念ながら、北名古屋市をフィールドにした卒論はなかったが、園・学校だけでなく地域とかかわる視点や、子どもとかかわるだけが保育教育なのではない視点は卒論に反映している。

市内の保育園や小学校での実習の訪問指導に行く際、継続的なかわりができるよう出合いを大切にしたほか⁽⁶⁾、2015年度から「教育委員会外部評価委員」「子ども・子育て会議委員」を拝命し、行政とのつながりができた。

具体的な卒論につながる書き方の指導としては、3年次5月21日にビデオ『図書館の達人』を見て、本学で使える3つのデータベースで検索の仕方を練習し、ワードの使い方を確認した。『図書館の達人』は、MS-DOSの時代のビデオだが、論文の書き方の基本はおさえているのでよく使っている。参考文献一覧がなければ論文ではないということを徹底する。10のステップに分け、仮のアウトラインをつくり、キーワードを使って文献リストをつくり(内容は読まない)、文献を揃えてから4種類のカードにしていく系統的方法である。カードを使ってやるのは、2年のゼミ論文まででいいかもしれないが、手指の操作で、ピックアップしたり並べかえたり、ということを学ぶことが必要で一度は経験さ

第1部		
①	石黒璃乃	才能につながるやる気を育てる ―〈叱る〉 〈ほめる〉 〈勇気づける〉―
②	鈴木楓太	セリエのストレスの三つの時期とレジリエンスの概念からなるストレスの解消法―子どもと教師のストレスの場合―
③	斉藤祥太	無差別大量殺人事件と背景を理解しない社会 ―秋葉原無差別殺傷事件から考える―
④	小玉美空	被虐待児が描く絵―絵を通して子どもが訴えていること―
第2部		
⑤	久米里奈	リピーターが多い店とは一沢山人が集まり活気に満ちた空間―
⑥	近藤寛之	音楽の必要性―BGMが無意識のうちに感情や行動に与える影響―
⑦	三川まい	人と犬が支えあえる社会をつくるために ―盲導犬と幸せに生きるために―
⑧	長谷川明里	保育現場において食物アレルギーから子どもをどう守っていくか ―厚生労働省『保育所におけるアレルギー対応ガイドライン』と一宮市での対応―
第3部		
⑨	鵜飼朋音	子どもの頃に受ける家族からの影響 ―母親・父親ときょうだいの必要性―
⑩	高橋祐里香	「恋愛」からみる『運命の人』の存在 ―脳内物質による「恋愛」説・子孫繁栄のための「恋愛」説を超えて―
⑪	松本美希	ジェンダーから考える生きづらさの原因 ―〈母親〉という存在がもたらすもの―
⑫	水谷 遥	母親の「育児不安」 ―「育児不安」を取り除くためには夫婦での対話が必要―

せたい。現在のOSに対応させて、ワードは、アウトライン機能、脚注機能などを練習する。検索は、本学の3つのデータベース（本学図書館蔵書検索、中日新聞データベース、cinii）を練習した⁽⁷⁾。この日はたまたま欠席が多かったが欠席者はのちのちまで論文に取りかかるのが遅かった。ある程度方法を知らないと、テーマをさがすことも困難になるようだ。また実際は、4年次9月から具体的に作業する中でいちいち説明し（直し）ていった。10のステップからすると、予備調査が膨らんだ形を整理し直したというのが現実の歩みとなった。次の学年は2年生「教育課程論」で『図書館の達人』を視聴した。また2016年度2年生ゼミ「基礎演習」では、ゼミレポートで、簡易だが以上の経験はおこなうように指導した⁽⁸⁾。

3年次の12月3日に、加藤ゼミと鎌倉ゼミに分かれたゼミがはじまった。直前の学生のテーマ（問題意識）の発表を受け、それぞれ教員が指導できるテーマで半分に分かれた。12月3日に、加藤ゼミの統一問題意識として、①どこに重点を置くにしても人生全体の中で考えること、②「慈悲」でいうと、苦しみの棘を抜く「悲」の観点を持つこと、③その際、人間関係で「縁」ということを考えること、を話し、中日新聞連載の「セーラー服の歌人 鳥居」を共通文献に数回読解・議論した。

ほんらい、共通文献は、講義の参考文献として予告され、あらかじめ決まっているのがよいが、まだその段階ではない。ゼミ分属の時、テーマで選ぶよう全体での指導を強めているが、まだ教員で選んだり、いっしょに受ける友だちで選んだりする傾向が残っている。今回はそういう状況を前提に、決まり始めた各自のテーマを事後的にまとめて文献を選んだ。レジュメを切って報告する、という指導が徹底できなかったのが残念だ。どこかで文献を読み、レジュメを切り、報告・討論するのがゼミの基本だ。レジュメを切るのは通常のゼミの時間以外に個別指導が必要だ（書き直すことが重要）。しかしまだゼミ時間以外の拘束をいやがったり、そういう時間的余裕のない生活をおくっていたりする状況である。実際は、読み合わせて疑問を出し合い、それぞれに関係した経験がないか議論した。ふりかえてみると、その人の存在（人生）⁹⁾をじっと見つめ、〈声〉を聴き取ろうとする姿勢は、論文に共通することになっていた。また、鳥居が短歌を〈書く〉ことで自分の人生を支えていたが、そういう卒論を〈書いて〉ほしいことも学生に伝わっていたように思うがどうだろうか。

どちらかという向きあうのにしんどいテーマを選んだ学生が多かったのも、問題に向きあえるだけの客観化する力（参考文献を読む）をつけるとともに話せる仲間づくりが必要と思った。その中でやっと自分自身と向きあえるのである。仲間がいないとしんどいテーマの探究は困難なのである。ただの相談役でなく、学問を介した、〈同志〉とても呼べる人間関係を経験してほしかった。それぞれの論文に、この統一の大きなテーマが、また自分の問題との向きあい（これは表現の裏に沈んでいる）がどうあらわれているか、個人の経験をこえて、社会的な意味をもっていつているかを重視した。『愛を乞うひと』を渡した学生は怖くて観られなかったと言っていた。一人ではなかなか重いことには向き合えず、ゼミでそういう仲間ができることが将来同僚性や外部の組織と連携する力になればと思う。

テーマに関しては、「ほんとうに調べたいこと」をさがすようにして、いかにも保育・教育というものでなくてもよいと指導した。これはすべての指導に優先する事項だ。また、本来、講義は、答えを覚えるのではなく、何を問うのか、問題を学ぶ位置と意義があり、卒論のテーマをさがす「ショーウィンドー」なのだが、1年生「子ども学総論」ではそもそも保育士のイメージも持てていない状態で、なかなかそういう受講はできなかったようだ。また、実習は、問題意識の苗床であるはずだが、やはり事前に「視点」を持っていないと「芽」が出にくいようだ。

テーマ決定の試行錯誤は推奨し、これはと思う本を渡して様子を見、テーマを変更したりするのに対応した。作業が進まなければ「ほんとうではない」のかなと考慮し、別の本を紹介して様子を見た。実は問題意識は、〈問題→探究〉なのではない。機械的に、動機を書き問題意識を書いて本文、というようにはなりにくい。ある程度の「答え」「解決策」が「見えて」、そこから逆に問題が設定されるのである。「見えて」いることが「仮説」となり、切実さがあれば、根拠を持って検証しようという意欲も出てくる。

以上を教訓に今後は、実習先が就職先候補になるだけでなく、フィールドにもなることを事前に準備して臨みたいと考えている。

4年生になると、エントリー書類の書き方や面接の練習に力が入ってしまった。3年の1～2月に問題意識をまとめて発表し、保育所実習前に「打ち上げ会」でしっかり語り合ったかったのだが、それができなかったのが残念だ。「卒論は最強の就活」、ということを実感させてあげられなかったのが指導上悔やまれる。2月に保育実習、5月から順次施設実習が入った。「卒論」が先になかったのも、それぞれ問題意識が育つ機会になりにくく、目的意識的にデータやエピソードを集める機会にもなりにくかった。逆に実習で「ダメージ」を受ける学生もあり、「保育士に向いていない」「コミュニケーション力がないと言われ、人間としてやっていけるか」などと帰学して思っていれば、とても問題意識をさがすどころではない。ここへのケアが必要である。

また、エントリーシート、特に自己アピール、自己紹介の指導をする時に、自分の経験をふりかえり、卒論のテーマにつなげようというのはやはり難しい。どこかの時点で「長い経験文」を書くことは重要だが（中井、2006年）、大学教育では、自分の経験を〈外〉から見るのが課題なのだから、経験をまとめて論文にはなりにくい。やはり〈参考文献〉を〈鏡〉として自分の経験をうつしてみる、そこで自分でも思ってもみなかった意味を発見する、そしてそれをまた検証する——こういうことが重要だ。研究動機は重要だが、基本的に簡潔に書くよう指導した。研究本体が客観的になれば、主観的な経験は背後に沈み、文章上は見えなくなるのである。個人的な問題意識が深ければ深いほど、仮説がきちんと客観的な検証をされる、というように客観的な表現形態をとれるのである。そして書くことと生きることの統一がはかられる。

2～3月に卒論をはじめていけば、しかもそれが「ほんとうに調べたいこと」であれば、迫力を持って自己アピールできるし、面接時の話題にもできる。就活自体が卒論の問題意識を深める機会にすらなるのだ。残念ながら、実習、就活、卒論とばらばらもしくは段階的に進んだ。スケジュールが企業、公立、私立で異なり、なかなか全員そろってすすめることが難しく、卒論はどうしても後回しになってしまった。

§ 3 卒論提出前の指導の概要（4年次9月から）

4年次9月以降、就職が決まった学生から順次本格的な取り組みが進んだ。全体として、

論文の形にしていくのは、直前のひと月半で相当追い込んでやった。

論文指導で気をつけたことは、以下である。

①テーマを確定すると同時に、「切り口」(研究対象)を限定した。また、テーマは必ずサブタイトルも付けて、あわせて5つ程度のキーワードでつくるよう指導した。これはキーワードが背景理解や検索に使えて、「限定」する助けになる意味もある。

②本学の図書館では必要な文献が少ないので、近隣の図書館の利用を試みた。特に名古屋市立鶴舞図書館は何人かが利用した。足を運ぶ経験が重要だ。必要なものが貸し出し中であることがあるのが教訓だ。重要な文献ほど貸し出されている可能性は高い。事前に検索しておかないと「不利益」を被る経験をしながら、「リスト」をつくって図書館に行く意味がわかってきた。インターネットは、使う場合は出典として明記するよう指導したが、文献を推奨した。『図書館の達人』では、「文献カード」として独立したカードだったが、ワードファイルでリスト作成し、あとで論文末にうつすことにした。出典の形式は、みんなだいたい指定したとおりにできた。著者名をはじめにし、一覧ではそのあいうえお順とした。

③ある程度調べが進んだ時点で、アウトラインの検討をおこなった。「カード」(文章)をピックアップする感覚がなかなか難しいようだったが、これは教育実習の記録は、メモ全部を書くのではなく、視点を決めて、また読む園の方針に合わせてピックアップする経験が活かされた。同時に「要旨」も並行して書き始め、全体像をつかむ感覚を助けた。書けるところから多めに書いてあとで削除したり並べかえたりする、というワードの特徴をみんなが活かしていた。

④仮説検証型にするよう検討した。「発見したこと」を明確にし、そこから逆に問題意識や仮説を書く(書き直す)やり方をとった。「カード」の並べ方に困った学生が、「カッコいい文章が思いあたらない」と相談に来たので、「以上をまとめると～～といえる。」など、つなぎの言葉を紹介した。『図書館の達人』では、カードを「論理的に」並べることが説明されていなかったが、つなぎの言葉を使う中で「論理」がわかり、それを「要旨」で1枚の中で展開が見えることで理解が進んだ。一番悩んでいた学生は他の学生を「指導」するまでになった。また、根拠は、大きくは「味方」と「敵」に分かれることを説明し、味方を増やし、敵をたたいていくとより客観的な論証になることが理解された。これらは、それぞれの論文に即して話し合った。要旨について、「仮説は～～。」「第1章『***』では、……と考察した。」など文章も提示した。わかったこと、発見したことを具体的に1つは代表させて書き込むよう指導した。通常の要約とちがって、論文全体の内容の圧縮ではなく、論文本体が読んでみたくなるだけの具体性をもたせる書き方を指導した。また、「主な参考文献」を末尾に書くようにした。これは学部全体でも統一していくといいが、何の本を読んだかでだいたい内容や出来具合が予想できる。参考文献一覧がない「文章」になるのも予防できると考える。論の展開に工夫がある論文がいくつかあったので、その

「ガイド」を入れた方がよかったかもしれない。

⑤文献などでのデータ収集が不十分だった場合、自分の経験を〈あるエピソード〉として、仮説をそのエピソードで検証する展開をいくつかの論文で図った。この場合も仮説は文献から構成するようにしたので、結果として自分の経験を（やや）客観的な視点でふりかえる（分析する）経験となった。

⑥10月頃、「何文字書いた？」と、量で卒論の進展を言い合う姿が学内で見られはじめた。学生には、文献から「カード」を引いて、「引用」があればそれで字数は増える、と、いって内容重視の指導を重ねた。今回の12論文は、「何文字書いた？」に引きずられずに、がんばった。だいたい10ページで規定の字数になるが、少ない学生でも16ページ、多いのは39ページ、平均23ページ、総ページ数279ページであった。

よくない「論文」は、タイトルが「〇〇について」「〇〇の考察」と漠然としたもので、はじめに動機がだらだら書いてあり、仮説も不明確で、ただ関係していそうな文章が並んでいくものである。参考文献一覧もついていない。これがwikipediaのコピー（出典表示もなし）だと最悪である。——こういうものはほとんどなくなってきていると思う。

⑦それぞれの参考文献をどう読解しているのか、元の文献と照らして指導することができなかった。レジュメを切る経験がない状態ではあるが、ある意味〈勝手読み〉を恐れずに大胆に書いていくことを励ました。問題意識がはっきりしていると読解もやれることが確認できた。間違った読みの場合、あとで訂正する責任があるが、こういう「失敗」をして恥をかくことが一番読解力をつけるのではないかとも思う。

⑧論文にびっしり朱を入れる指導もあるが、人数も多いし、体調も悪かったので、そうはしなかった。典型的な部分を直し、あとは自分の責任で直すよう言った。文章や字句を直すのは本人の社会的責任である。提出・印刷したもの、間違いは本人文責でそのままにしてある。また学生には、ほんとうに自分のものとして書きたければ、文章にも愛情がわいて、直すようになるから、指導としては、ほんとうに自分のものとして書きたいものであるかを指導する、と言って納得してもらった。ただし、朱をびっしり入れて、教員と対話しながら書き直せば書き直すほどどんどんレベルが上がっていく経験もしてほしい気持ちもある。

§ 4 卒論発表会

2017年1月26日に学部全体で卒論発表会をおこなった。

樋口由訓氏の出席があり、北名古屋市教育局前参事の森弘徳先生や大学院修了生の岡山喜美代さんよりメッセージをいただき、ありがたく感じた。3年次にお世話になった方々に1週間前に案内したが、年末におこなっておけば参加も増えたと反省している。今後、論文作成でお世話になった方々、教育実習でお世話になった方々、出身高校の先生などに出席してもらえる発表会をめざしたい。これは〈大学評価〉の基本の一つであろう。

一人一人の論文の完成で「一段落」してしまっていたが、今回の指導の大きな反省の一つは、論文を相互に読み、議論し批判しあうことができなかったことである。提出後、ペアをつくって論文を交換して読み合い、コメントする課題を出した。また、発表会の時に、「総括討論」の時間をとって、最後の1日だが、論文を議論する機会をつくった⁽¹⁰⁾。

3部構成と発表順にも「意図」がある。同じテーマを分担して研究したと考えると、いろいろなつながりが読み取れるだろう。全体の統一テーマについて、ある程度共通性があると思うがいかがであろうか。これが「講義」につながっていると、〈循環〉する。

なお、今回、2、3年生の参加を義務とした。2人分は聞いて、A4で一枚のレポートを出す。いい加減なものに対する批判とともに、「私も先輩のように聞き応えのある論文を書きたい」声、多様なテーマがあることを知って、それらしいありきたりのテーマでなく、自分の調べたいことを深めればいいのか、との「解放」された声がかけてうれしかった。2年生の「基礎演習」で提出されたばかりの卒論を配り、手にとってもらった。具体的なイメージが持てたと思う。

§ 5 大学4年間の集大成としての卒論

私は来たばかりの1年目に「芸大改革推進本部・教学組織改革分科会」委員となり、人間発達学部のカリキュラム改革に関わった。新カリキュラムは2015年度入学生からの実施だったが、3ポリシーを明確に、実習を節に、既存の幼・保・小の免許資格授業を創造的に組み合わせてとっていくカリキュラムはこの学年でも適宜前倒して実現してきた(「カリキュラムイメージ」参照)。8領域の専門ゼミ全教員担当、卒論重視などもそうである。

ゼミ・卒論は、ディプロマポリシー(DP)だと、「保育・教育の理論とスキルを学び、実習等の経験を積み上げ、芸術的感性を備え、教育・福祉の両面で、子どもの成長・発達を支える力を獲得する」とある中で、「積み上げ」られた「理論」や「子どもの成長・発達を支える力」の具体的内容になっている。今回このレベルの論文が出揃ってきたことは、4年間のカリキュラムの「ゴール」が論文のテーマ・成果を通じて具体的につかめるようになったということである。

一般的に大学のカリキュラムは、以下の基本的構造を持つと考えられる。

(〈教養〉) — 〈概論〉 — 〈講義(専門)〉 — 〈ゼミ〉 — 〈卒論〉 — (〈修論〉) …
〈講読〉 〈特論〉

教職課程：〈教育理念〉 〈人間理会〉 〈方法(指導法)〉 〈実習〉

【名古屋芸術大学人間発達学部2017 新カリキュラム 4年間のカリキュラムイメージ】

20160611

名古屋芸術大学の教育理念と目標

芸術学部および保育・教育系学部を擁した日本唯一の総合芸術大学として、高度な学芸を教授研究する。これにより幅広い知見と芸術的素養を備えた人を養成することで、人々の心を豊かにし、芸術文化の発展および地域・社会に貢献する。

人間発達学部のポリシー（学生のみなさんへの期待・教員の願い）DP

{保育・教育の理論とスキルを学び、実習等の経験を積み上げ、芸術的感性を備え、教育・福祉の両面で、子どもの成長・発達を支える力を獲得する}

卒業

	学部 必修	ゼミ	保育系		幼稚園系	小学校系	全学総合共通科目 目 一般科目群 28 横断科目群 14
			保育所 0～6歳	その他の児童 福祉施設 0～18歳			
4年 磨く/ま とめる		卒業研究・卒業制作	保育・教職実践演習(幼) 施設実習 10days		保育・教職実践演習(幼)	教職実践演習(小)	
3年 試す/深 める	子ども 家庭 福祉 I	専門演習(8領域) 発達と障がい学 校乳幼児/生活/音楽/美術/福祉/メディア	保育所実習 I 2w 2月 保育課程論		社会的養護 I 教育方法論 幼稚園実習 3w or	特別活動論 小学校実習 4w 10月 介護等体験 7日	横断科目群 14 単位 音楽を知る 美術を知る デザインを知る
2年 歩む/問 う	発達心 理学	基礎演習	保育所実習 II 2w 2月 保育指導法 保育者論		教育原論 クリエイティブ幼稚園実習 1w 次々 教育課程論	教育制度論 教職論 社会科指導法 算数科指導法	子どもを知る広い視野を持つ グループワーク力をつける
1年 出会う/ 気付け	保育原 理 子ども 学総論	入門演習 (北名古屋市 夏まつりボラ ンティア、クリ エ幼稚園訪問 含む)	保育内容総論 社会福祉 ピアノ実習 保育の心理学 I		保育内容演習 人間関係 保育内容演習 環境 保育内容演習 言葉 保育内容演習 表現 保育内容演習 健康	(小学校体験活動) 2月 社会 算数 図画工作 音楽 生活	健康スポーツ 情報メディア演習 コミュニケーション 英語 日本国憲法 大学生になる

入学

{入学者＝保育士、幼稚園・小学校教諭などを希望し、進路を幅広く人間形成の中で考えようとする人、経験から深く学び自他の成長をはかっていこうとする人} (AP=受験する高校生への期待)

取り方 (CP) : 保育士養成課程、幼稚園および小学校教諭養成課程の3課程を創造的・計画的に組み合わせて学び、総合的に人間形成をはかり、進路を明確にするカリキュラムを編成している。1年目は共通する深いところを学び、広げ、迷い、2年生で現場と関わりながら進路を決定する。3年生は実習の年。実践と理論の往還を始めます。3年生からのゼミは、本格的な研究・制作。卒論・卒研は確かな土台。他学部の芸術系科目も受講。

この流れの中で、〈教えられる存在〉から〈自分で研究する主体〉へ変わっていく（潮木、1984年）。これと照らすと、やはり概論や講義から〈問い〉を学ぶ、引き継ぐことが前提として重要である。講義をアクティブ・ラーニング化するのではなく、講義は講義として問題群を提供する体系性を持ったものでなければならない。〈自分で研究する主体〉になるためにこそ能動的に〈教えられる存在〉になる練習とその説明が必要であろう。それが、他の講義や実習、場合によったら就活の場をも問題意識が深まる機会にできるだろう。

教職課程のあり方へも問題提起できる。2005年頃からであろうか、文科省『教職課程認定申請の手引き』レベルで、「教職に関する科目」の科目名から「研究」をとるよう「指導」が入るようになり、現在では「各科目の名称例について」から実質的に選ぶようになっていく。これは、教職は研究ではないという主張のようである。「教職実践演習」導入の際も、卒論を圧迫するのではないかと慎重意見があったが、「教職実践演習」でも「研究」の要素は指示されていない⁽¹¹⁾。ゼミ・卒論は、「教職に関する科目」外ではあるが、これがあることによって、本学のめざす「子どもの成長・発達を支える力」が獲得できる。また、中教審のいう「学び続ける教師」も「教職に関する科目」だけでなくゼミ・卒論があつて可能になる。卒論を読み合う中でそれぞれの「詳しい」「得意な」テーマがわかり、困った時に頼られることで卒論の学びも深まっていく。

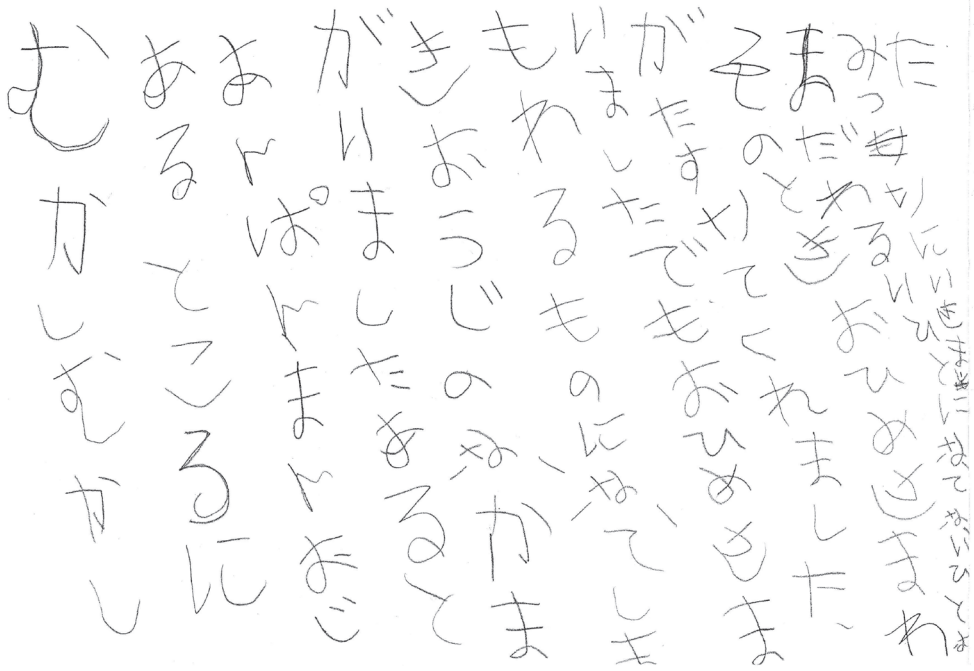
卒論をなくしたり、あつても簡単なレポートですましたりする大学が増えているようだ。卒論を書くことこそ大学教育の存在意義と言ってよい。本学部は、卒論重視の方向で、すなわち大学らしい大学を目指す方向でよいと思われる。学力がない、やる気がない、勉強したくない、本を読みたくない、などと学生のせいにして卒論指導のレベルを下げていくとする主張には、今回の学生の卒論が実績として反論できる。

課題として、やはり、〈文献を読んでレジюмеを切って報告討論する〉ことを位置づけたい。これはと思える〈1冊〉に出会って卒業してほしい。

§ 6 18年間の集大成としての卒論（発達の意味）

5歳半から6歳ごろ、「生後第3の発達の原動力」が誕生する⁽¹²⁾。それまでの2回の原動力の誕生は、交流の手段として微笑み（4か月）、話し言葉（10か月）を伴っていたが、いよいよ〈書き言葉の時代〉となる（田中、79ページほか）。

書き言葉の特質は、〈いま・ここ〉にいない人とコミュニケーションできることである（プラトン、161ページ以下）。微笑みや話し言葉は、〈いま・ここ〉がすぎると消えてしまう⁽¹³⁾。書き言葉は何百年も後／前の人ともコミュニケーションできる。この蓄積が文化だ。6歳から14歳ごろまで、主として小学生時代とは、〈いま・ここ〉をこえる力、また〈いま・ここ〉をこえることで逆に〈いま・ここ〉が深く理解できる力を養う時期である。書き言葉の字形や書き順を覚えることはその要素にすぎない。だから「書き言葉の時代」は「文化の時代」で、それが小学校教育の基本なのである。



図表の「手紙」は、幼稚園年長組（5歳11か月）の子どもが父親にあてて書いた手紙だ。前日人形で遊んでいて、わるいひと（バイキンマン）が、「わるいひとあめ」を王子（アンパンマン）の仲間に食べさせて次々悪い人にしてしまった。「どうしよう……」というところであそびは終わりで就寝した。翌日父親が帰宅するまでにどうするか考えて、〈いま・ここ〉にいない父親に、まだ悪い人になっていない人を見つける解決策を提案して伝えようとした手紙だ。実際は、悪い人になっていない人と悪い人の中に小さくなって入って（ドラえもんの小さくなるトンネルと同じ発想）、お腹の中にあるわるいひとあめを壊して、いい人に戻す、という遊びになった。

字形や言葉も未熟だが、〈いま・ここ〉をこえ、ここにいない人になんとか伝えたいことがあることが重要だ⁽¹⁴⁾。

幼稚園や小学校で〈書いたもの〉、この「手紙」は〈卒業論文のたね〉なのだ。この「手紙」から出発して、書くことの集大成が卒論ととらえたい。卒論においても、〈いま・ここ〉にいない人の〈声〉を読み解き、〈いま・ここ〉にいない人に〈伝えたいこと〉があるか。そしてそれは跳ね返って、〈いま・ここ〉にいる自分やかけがえのない仲間の問題や悩みに光をあてる（〈棘を抜く〉）ことにつながるかどうか、それが問われている。

中学生になると、14歳ごろ、「生後第4の発達の原動力」が誕生し、これは抽象的記号を駆使して、「ありえないこと」を考え、そこから逆に現実を深く理解する時期に入る。

今まで考えられなかった「仮説」を立て（想像し）、それを検証することで現実を深く探

究する……つまり卒論は書き言葉の集大成であると同時に、「生後第4の発達原動力」の成果でもあるととらえられる。

§ 7 卒論その後

卒業してはじめての〈職場〉。そこに〈ゼミ〉を再現してほしい。職場学習会、親との相談懇談会、子ども同士がけんかしている場面……などなど。「総合的な学習の時間」にやれば、プレゼミだ。卒論があなたの人生で困った時に支えになり、また道を開いていく光となりますように。

註

- (1) このセクションは、冊子版『2016（平成28）年度 ゼミナールⅣ「子どもの生活と教育」領域 加藤聡一ゼミ 卒業論文集』「はじめに」による。
- (2) 『名古屋芸大グループ通信』24号、2013年7月。
- (3) 田中昌人教授退職後は山田洋子教授。助手は山崎雄介氏から松下佳代氏でそのあと私。
- (4) 京都教育大学の加藤義和先生からは、ルソー『エミール』を丁寧に読解し議論することを学んだ。年に数ページしか進まないが、それでよい経験が積めた。京都大学は、4年生と大学院生の合同のゼミがあった。本学でも、何人かが学部より進学し、4年生といっしょにゼミができるようになるとういと思う。これは、2014年度に、3年のゼミ生に大学院の演習に一部出席してもらい、先導的な実験をおこなえている。
- (5) 2014年度の「ゼミナールⅢ」は所属1名。2016年度の「ゼミナールⅢ」は、教員ごとに定員を定めたが、私のゼミの希望は0人で残念だった。なお、2017年度の「ゼミナールⅢ」から、私は「発達と障がい」領域に異動する予定である。
- (6) 1年目2013年に鴨田小学校に実習訪問指導にいった際、森弘徳先生と出会えたことは幸運だった。森先生は2014年度より2年間北名古屋市教育委員会参事を務められ、市内小学校との交流にご協力いただいたほか、教員免許更新講習の講師もしていただいた。卒論発表会にあたっては、「未来を担う皆さんが、教育的な見識をより一層深められ、地域、生活と密接な教育活動の担い手となっていただくことを切に願っています」というメッセージまでいただいた。
- (7) 本学図書館の公費を使ったデータベースは極めて貧弱で、中日新聞データベース、cinii もやっと導入してもらえた。利用が少ないと使えなくなる可能性がある。
- (8) 「この1冊」を決め、テーマを仮に持つてみることを指導上重視した。
- (9) 三川論文の場合は「犬」。
- (10) 発表形態については、基本は要旨をOHCでうつしながら、必要に応じて論文本文や資料を提示するやり方にした。要旨は印刷して配布してある。パワーポイントは

みばえでわかった気になるようなのでやめた。松本さんはキーセンテンスなどをボードにして、OHCで適宜うつしていきなりわかりやすかった。高橋さんは、スケッチブックにポイントを書き、半分めくって議論にあわせて付け加えていくような工夫がされていた。

- (11) 保育士資格に必要な「保育実践演習」の方は、目標に「保育に関する現代的課題についての現状分析、考察、検討を行う」とあり、研究的要素が入っている。
- (12) このセクションは、加藤（2017年）の一部を使い、加筆した。
- (13) もちろん録画、録音技術により、書き言葉の性質を持つようになっている。
- (14) 一枚におさめようと字を小さくしていく発達の〈見通し〉が持てているところも注意したい。

参考文献

潮木守一『京都帝国大学の挑戦―帝国大学史のひとこま』名古屋大学出版会、1984年（1997年、講談社学術文庫）。

加藤聡一「子ども・生徒の人格発達に対応する豊かな学級活動『指導計画』づくり（特別活動）―学級を《オキュペーションズ》の基本単位ととらえる―」『生活教育』2010年4月号、737号、pp. 48-55。

加藤聡一「カリキュラムにおける総合学習・ゼミナールの位置づけと意義―〈教育課程の連関性と全体性〉と大学での教育学―」、武蔵大学教職課程『教職課程研究年報』第24号、2010年。

加藤聡一「第10章 民主主義の教育思想―デューイ」、山崎英則ほか編著『シリーズ現代の教職 3 西洋の教育の歴史』ミネルヴァ書房、2010年。

加藤聡一「どこで出ていくか／出番だって言われそう―わくわくドキドキの新しい出会い」『生活教育』2017年4月号。

田中昌人『人間発達の理論』青木書店、1987年。

中井浩一『脱マニュアル小論文―作文と論文をつなぐ指導法』大修館書店、2006年。

日本図書館協会『図書館の達人 PartII 第6巻 レポート・論文のまとめ方』（ビデオ）日本図書館協会、1993年。

プラトン（藤沢令夫訳）『パイドロス』（岩波文庫）岩波書店、改版2010年（初版1967年）